

青年期における友人関係の機能について

梅 本 信 章

(1) 目 的

青年期には自己への関心が高まり、自分を対象化して、自己を客観的に把握しようとする傾向が強くなる。そして、「自分はどんな人間なのか」、自分の自分自身についての捉え方が妥当なものなのか、あるいは自分のものの見方・考え方・感じ方ないし判断が妥当なものなのかどうかといったことに大きな関心を持つ。青年期は自己像・自己概念の形成が急速に進む時期なのである。また青年期は、対人関係の中でも友人関係が重要な位置を占める時でもある。我々は日常の自己に関わる経験から、自己についての様々な情報を得ているが、それが自己についてのイメージ・意見・態度あるいは評価などを形作っていく際の重要な素材になっている。そして、情報獲得のかなりな部分が対人関係の中で行われていると考えることができる。以上のことからすれば、青年期の自己像・自己概念の形成には友人関係も大きく関わっていると考えることができる。

柏木(1982)は自己概念の形成が他者による自己と自分自身からみた自己とを比較照合し、両者のずれを検討しながら、自分からみた自己を適正なものへと修正していく能動的な過程であると指摘しているが、他者が「私」をどう思い、どう認知し、どう評価しているかが自己概念の形成の重要な素材になるのである。柏木(1982)はまた「自分自身の見る自分」と「他者による自分」は必ずしも常に一致しているわけではなく、多少のずれがあるのが普通であると述べている。確かにこの両者が完全に一致することはないといえる。しかしまた、両者のずれが大きい場合、社会生活を送っていく上で何かと不都合な事態に出会いがちになるだろう。従って、自分からみた自分と他者からみた自分

のずれがあったとしても、一般に、決して大きいものではないと考えられる。

一人の個人(A)について、その周囲にいる人々がすべて一致した見方・評価をしているとは考えられない。各人毎に多少なりとも異なった見方・評価をしているはずである。そして、各人の(A)についての見方・評価はその人の(A)に対する態度・行動を規定する要因の一つになっている。一方、(A)が「他者からみた自分」を把握・理解するにあたっては、その他者の(A)に対する態度・行動が大きな手がかりの一つになっている。このように考えると、個人はかなり多くの「他者からみた自分」を把握・理解することが可能であるといえるが、実際には、日常接する相手毎に細かく分けて「他者からみた自分」を作り上げているわけではないだろう。把握・理解の対象になるのは主に日頃接触する機会の多い相手や親しい人たちであろうし、個人別ではなく、「周囲からみた自分」のように一般化している場合も多いといえる。しかしそれでも、周囲の人々が等しく同じように自分のことをみていると思う人は多くないと思う。相手が親しい人か親しくない人か、好きな人か嫌いな人かなどによって、「他者からみた自分」の内容に相違が生じることは十分に予想できる。

自分に対して他者がどのような見方をしているか、どのような評価をしているかということと、そのような見方・評価をする他者への好意・魅力との関係については、社会的比較過程の理論や認知的斉合性理論並びに Self-Esteem 理論によって考えることができる。

社会的比較過程の理論(Festinger, 1954)では、人が自分の意見、態度、信念等を正確に把握することは、自分の取るべき行動を決定するにあたって不可欠であり、人には自分の意見・態度・信念やその妥当性を明確に評価しようと

いう動因があると仮定している。そして、評価にあたっては客観的・非社会的手段による評価（例えば、コップを落としたら割れるかどうかについての意見の妥当性は、コップを落とすことによって直接確かめられる）と社会的評価（他の人の意見・態度・信念と自分のそれとの比較に基づく評価）の二つがあると考えている。社会的評価による場合は、自分の意見・態度・信念と他の人のそれとが一致あるいは類似していればいるだけ、自分の意見等の妥当さが確かめられることになる。従って、意見・態度等に関して、人は自分に類似していない人よりも類似している人の方に魅力を感じると予想される。Byrne (1961, 1965) は、自他の態度の類似度を操作して、自他の態度が類似していればいるほど、類似した他者への好意が直線的に大きくなることを確かめている。社会的比較過程の理論に基づいて、意見・態度・信念の対象が自分である場合について考えてみると、自分についての意見・態度・信念の妥当性は客観的・非社会的手段によっては評価しにくいものであって、社会的手段に負うところが大きい。即ち、個人(A)は自分(A)の自分(A)に対する意見・態度・信念と他者の自分(A)に対する意見・態度・信念とを比較し、両者が類似していればいるほど、自分の自分に対する意見・態度・信念の妥当性を確信できることになる。それ故、自分に対する意見・態度等が自分のそれと類似している人の方に魅力を感じると予想することができる。

認知的斉合性理論は、ある認知とそれに関連した他の認知とが一貫していることが望ましく、両者の間に不調和・不適合があると、不快感や心理的緊張が高まり、そのため不調和・不適合を解消させるように圧力が働くとする。認知的斉合性理論によれば、他者が自分について自分と類似した見方・評価をすることは、自己認知に斉合性をもたらすことになり、望ましいことである。従って、そのような他者への好意は、類似しない見方・評価をする人への好意よりも、大きくなると考えられる。

一方、Esteem 理論では、人は自分の評価を高

めようとする欲求を持っていると仮定するので、他者から自分について好意的な見方・意見を示されたり高く評価されたりすることは大きな報酬価値を持つことになる。従って、人は自分を高く評価したり好意的な見方・意見を示す人に対して、そうでない人に対するよりも、大きな好意を抱くと考えられる。

ところで、これに当人の自己評価の程度を加えて考えると、認知的斉合性理論と Esteem 理論から導かれる仮説に相違が生じる。自己評価の高い人についてはいずれの理論に立っても同じ仮説が導かれるが、自己評価の低い人に関しては仮説の対立がみられるのである。Esteem 理論で考えれば、自己評価の高い人にとっても他者から高く評価されたり、好意的な見方・意見を示されること（つまり、自他のずれが小さいことになる）は報酬的であるが故に、そうした人への好意はそうでない人への好意よりも大きくなるといえる。他方、自己評価の低い人は、自己の評価を高めたいという欲求が自己評価の高い人よりも強いことから、高い評価や好意的な見方・意見を示されること（つまり自他のずれが大きい）は一層大きな報酬価値を持つ。それに対して、低い評価を示されること（自他のずれが小さい）は報酬とはならない。そのため、高い評価をしてくれる他者への好意の方が、そうでない他者への好意よりも、大きくなると考えることができる。斉合性理論から考えた場合、自己評価の高い人が他者から高い評価や好意的な見方・意見を示されることは自己評価と類似・一貫する（つまり、自他のずれが小さい）のに対して、低い評価は一貫しない（自他のずれが大きい）ために、高い評価を示す人に対する好意は、そうでない人に対する好意よりも、大きくなると考えられる。しかし、自己評価の低い人にとっては、他者による高い評価や好意的な見方・意見は自己のそれとは調和せず（自他のずれが大きい）、心理的緊張を生み出しやすい。それに対して、低い評価は自己のそれと一貫性を持つ（ずれが小さい）。それ故、低い評価を示す他者に対する好意の方が、高い評価や好意的な見方・意見を示す他者に対する好意よりも、大

きいと予想できる。これらに関してはいくつかの研究がなされているが、結果はまちまちである。これについて、Jones (1973) は他者からの評価や見方・意見が客観的な情報として示されるときには Esteem 理論に基づく仮説が支持され、他者からの評価や見方・意見を被験者が推測する場合には、斉合性理論に基づく仮説が支持される傾向があると指摘している。ただ研究の性質上、これらの研究では被験者が組み合わされる相手は初対面の人かペーパー上の人である場合が多く、実際に親しい関係を維持している人たちを取り上げてはいない。

ところで、一貫性・斉合性をもたらすにせよ、自己評価を高めたいという欲求を満たすにせよ、そのことが相手への好意を高めるのであるならば、ある個人が特定の人との親密な関係を維持している場合、その相手の人が他の人たち以上にその個人に一貫性・斉合性をもたらしているか、あるいはその個人の自己評価を高めたいという欲求を満たしていると考えることができる。そうだとすれば、現在親密な関係にある相手からは、自分について自分と類似した評価や見方を示されたり、高い評価や好意的な見方を示されたりすることも多く、また親しい相手からは、自分について自分と類似した評価や見方をされているだろうと（即ち、一貫性・斉合性を持つように）認知するか、あるいは自分に対して高い評価や好意的な見方をしてくれていると（即ち、自己評価を高めるように）認知していると考えることができる。だからこそ、親密な関係が維持されているのであろう。このように考えると、「自分からみた自分」と「他者からみられているであろう自分」との類似・非類似と他者への好意並びに自己評価との関係について、前述したのと同じような仮説の違いが生まれる。社会的比較過程の理論や認知的斉合性理論に従えば、自己評価の高い人も低い人も、「自分からみた自己像」（以下では「自己像」とのみ記す）と親しい「他者からみられているであろう自分像」（以下では「推測的自己像」と記す）とのずれが、「自己像」とあまり親しくない他者からの「推測的自己像」とのずれよりも小

さいが故に、その他者との親しい関係が維持されるといえる。それに対して、Esteem 理論に従えば、相手が高い評価や好意的な見方をしてくれていると推測できるが故に、その人との親しい関係が維持されるといえる。従って自己評価の高い人の場合は、「自己像」と親しい相手からの「推測的自己像」とは類似していて、ずれが小さいのに対して、自己評価の低い人の場合は、「自己像」と親しい人からの「推測的自己像」とのずれが大きいと考えることができる。要するに、斉合性理論からすれば、友人は個人の自己像や自己概念の妥当性の確信をもたらす役割を果たしていると考えられることができるし、Esteem 理論では、自己評価を高めたいという欲求を満たす役割を友人が果たしていると考えられることができる。

被験者の自己評価を要因として加えてはいないが、Backman & Secord (1962) は寮に入っている大学生を被験者として、① 16 個の形容詞対の中から自分に最も特徴的だと考える形容詞を 5 つ選択する、② 他の寮生が自分（つまり被験者）について選んだであろう形容詞を推測して 5 つ選択する、③ 寮生を好きな順に序列化する、という手続きで調査し、③ の順位の高い者の方が低い者との場合よりも、① と② の一致度が高いという結果を得ている。楠見 (1989) も、Backman らと類似した方法で、同様の結果を得ている。さらに、深谷・田宮 (1971) は、二者の交友関係において、相互に好意的感情を持つ場合の方が、相互に非好意的感情を持つ場合よりも、他者からみられていると思われる自分像を自分からみた自分像に似ていると認知する傾向があることを明らかにしている。また、Bailey 他 (1975) も、知能の程度について、友人から思われているであろう程度と自分からみた程度との間には高い相関があり、しかも、交友関係にある期間の長い方が短い場合よりも相関が高いことを明らかにしている。これらの結果はいずれも社会的比較過程の理論や認知的斉合性論に基づく仮説を支持するものである。

「推測的自己像」は基本的には推測に基づくものであるから、前述の Jones (1973) の指摘に従

えば、自己評価を考慮したときの「自己像」と「推測的自己像」とのずれの程度と好意・魅力の関係については、社会的比較過程の理論や斉合性理論に基づく仮説が支持されると予想できる。浜名（1974）は、自己のパーソナリティの評価水準・受容水準の高低にかかわらず、自己認知と他者から認知されているであろう自己との一致度が、好意を持たない他者の場合よりも好意を持つ他者の場合の方が大きいことを示している。しかし一方、自己評価の高い被験者全員が好きな友人からの評価を肯定的に推定し、自己評価の低い人の多くも肯定的に推定していることを示した研究（鈴木 1976）もあって、必ずしも一貫した結果は得られていない。そこで、本研究では、自己像と推測的自己像とのずれに関して、いずれの仮説が支持されるのかを改めて検討することによって、女子青年における友人関係の果たす役割について考察することを目的とする。

さらに、本研究では、意見・態度・信念の対象が自分である場合として「自己像」を考えているので、一般的な態度に関して、自分の態度と他者から思われているであろう自分の態度との関係についても参考までに検討する。

なお、自己評価の低い人は自己像・自己概念が不安定でその妥当性への確信が相対的に弱く、それだけに「自己像」と「推測的自己像」の斉合によって、自己像・自己概念の妥当性を確信したいという動因が自己評価の高い人よりも強いだろうと考え、本研究の一応の仮説として、社会的比較過程の理論や認知的斉合性理論から導き出される仮説が支持されると考える。

(2) 方 法

手続き：質問紙法による調査であり、調査は2回にわたって実施された。1回目の質問内容は4部からなる。一つは、20組の形容詞対の各々について、自分がどの程度あてはまるかをSD法方式で7段階（とても・かなり・やや・どちらでもない・やや・かなり・とても）に評定するものである。形容詞対は井上他（1985）を参考にして選択した（表6参照。質問紙の中での

配列順序は表6の通りであるが、形容詞対の左右の配置は異なる）。二番目は15項目からなる態度測定尺度で、「おおいに賛成」～「おおいに反対」まで7段階に評定するものである。これは久世他（1985）と西平（1971）を参考にして項目を選択した。三番目は10項目（4段階評定）からなるRosenberg（1965）のSelf-Esteem測定尺度である。最後は、ソシオメトリックテストで、同じ学科・学年の人の中から親しくしている人を4人選択するものである。このテストで、被験者が一番目に名前を挙げた相手を本研究では「友人」とした。また、被験者と同級で、被験者が名前を挙げなかった人たちの中から実験者がランダムに選択した人を「非友人」とした。

2回目の調査は、20組の形容詞対と態度測定尺度の各々に関して、「『友人』からみられているだろう自分像」並びに「『非友人』からみられているであろう自分像」を推定して、1回目の調査と同様の方法で評定するものである。併せて、「友人」「非友人」と「どのくらい親しくしているか」並びに「個人的なことをどのくらい話すか」を7段階で評定してもらった。これは「友人」「非友人」の操作が妥当であったかどうかを検討するためのものである。

被験者：被験者は大学2年の女子学生49名である。

調査年月日：第1回調査…1989年9月中旬
第2回調査…1989年10月上旬

これとは別に20対の形容詞の各対毎に、どちらの形容詞がパーソナリティーの特徴として望ましいかを、大学生（上述の調査の被験者を含む）95名に選択してもらった。調査は1989年10月上旬から中旬におこなった。

(3) 結果と考察

Rosenbergの尺度に基づく自己評価得点は各項目毎に4点～1点に点数化して合計した（合計得点の範囲は40点～10点である）が、平

青年期における友人関係の機能について

表1 自己評価得点の平均, 標準偏差並びt値

	低自己評価群	高自己評価群	t	P
自己評価得点	22.4 (1.72)	27.2 (1.30)	-10.236	P<.001

上段: 平均 下段: 標準偏差

表2 友人/非友人との親交度の平均と標準偏差

	友人	非友人
高自己評価群	13.1 (1.17)	7.1 (2.46)
低自己評価群	13.0 (1.31)	7.4 (2.38)

上段: 平均 下段: 標準偏差

均24.8, 標準偏差は2.73であった。そこで, 得点が25点の者を除き, 24点以下の者(22名)を低自己評価群とし, 26点以上の者(22名)を高自己評価群とした。低自己評価群と高自己評価群の平均並びに標準偏差は表1に示してある。自己評価得点に関しては, 高自己評価群の方が低自己評価群よりも有意に高かった(P<.001)。

表2は「友人」並びに「非友人」と被験者の親交度の平均と標準偏差を示したものである。親交度は第2回調査の質問項目である「友人」及び「非友人」と「どのくらい親しくしているか」, 「個人的なことをどのくらい話すか」(それぞれ7段階評定)の評定値を合計したものであり, 点が高いほど被験者が親しくしていると回答したことを表している。分散分析の結果, 他者(友人-非友人)の主効果のみ有意であり(F=201.619, P<.001), 自己評価(低-高)の主効果並びに交互作用は有意でなかった(表3)。このことから, ソシオメトリックテストの第1被選

択者である「友人」と実験者がランダムに選択して組み合わせた「非友人」とでは, 親しさに違いがあり, 被験者が「非友人」とより「友人」と親しくしていることが確かめられた。

自己像用の20対の形容詞についての評定は, 一方の形容詞に「とても」当てはまるとした場合は7点, 「かなり」は6点, 「やや」は5点とし, 他方の形容詞に「とても」当てはまるとした場合は1点, 「かなり」は2点, 「やや」は3点, そして「どちらでもない」は4点と点数化して集計した。形容詞対毎に, 「自己像」についての評定値と「推測的自己像(友人)」についての評定値の差の絶対値を求めて, 20対分を合計したものをもち被験者個人の「自己像」と「推測的自己像(友人)」の「ずれ」得点とした。「自己像」と「推測的自己像(非友人)」との「ずれ」得点も同様にして求めた。各々の「ずれ」得点の平均と標準偏差は表4・図1に示してある。分散分析の結果, いずれにも有意差はみられなかった(表5)。即ち, 「自己像」と「推測的自己像」とのずれの程度に関しては, 推測する相手が「友人」であっても「非友人」であっても違いがなく, また, 被験者の自己評価が高くて低くても相違がなかった。従って, 自己評価の高低にかかわらず, 「自己像」と「推測的自己像(友人)」のずれの方が, 「自己像」と「推測的自己像(非友人)」のそれよりも, 小さいという認知的斉合性理論から導かれる仮説は支持さ

表3 友人/非友人との親交度についての分散分析表

Factor	SS	df	MS	F	P
友人 / 非友人	744.727	1	744.727	201.619	P<.001
自己評価(高/低)	0.045	1	0.045	0.012	ns
交互作用	0.727	1	0.727	0.197	ns
誤差	310.273	84	3.694		

表4 自己像と推測的自己像との「ずれ」得点の平均と標準偏差(絶対値の場合)

	自己/友人	自己/非友人
高自己評価群	16.6 (5.91)	17.5 (7.73)
低自己評価群	19.7 (9.03)	18.8 (8.02)

上段：平均 下段：標準偏差

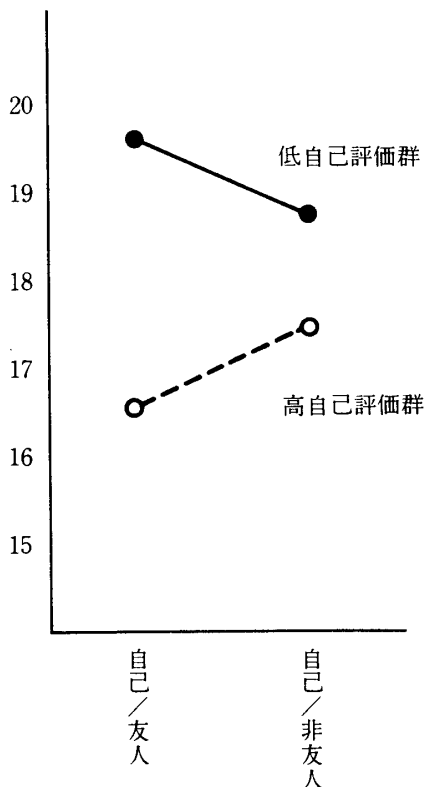


図1 自己像と推測的自己像との「ずれ」得点(絶対値の場合)の平均

れなかった。

次に、一対の形容詞のどちらがパーソナリティーの特徴として望ましいかという質問に対する回答を集計した結果が表6である。表6か

ら明らかなように、各形容詞対で望ましいとされたものは大体どちらか一方に偏っていた。そこで、一方の形容詞を「望ましい」とした者が90%以上である16組の形容詞対を選んで、「望ましさを考慮した検討のための資料とした。評定値は、「望ましい」形容詞の方に「とても」当てはまるとした場合は7点、「かなり」の場合は6点、「やや」の場合は5点とし、反対側の形容詞に「やや」当てはまるとした場合は3点、「かなり」は2点、「とても」は1点とした。「どちらでもない」は4点と点数化して集計した。前述の分析では、「自分からみた自己像」と「推測的自己像」との「ずれ」得点は両者の評定値の差の絶対値の合計をもってあてたが、ここでの分析では、「自分からみた自己像」、「推測的自己像(友人)」、「推測的自己像(非友人)」の各々について、被験者毎に16形容詞対の評定値を合計した得点(望ましき得点)を利用した。平均と標準偏差は表7・図2に示してあるが、得点が高いほど望ましく思っていることになる。分散分析の結果(表8)、「自己/友人/非友人」と自己評価の主効果が有意であった($F=6.516, P<.01; F=5.06, P<.05$)が、交互作用は有意ではなかった。個々についてみてみると、高自己評価群では、「推測的自己像(友人)」の得点は「自己像」並びに「推測的自己像(非友人)」の得点より有意に高く($t=2.883, P<.01; t=4.124, P<.01$)、「自己像」と「推測的自己像(非友人)」とは差がなかった。つまり、友人からは自分が「自己像」以上に好意的にみられていると認知している一方、非友人からは「自己像」と同じ程度にみられていると認知している。また、友人と非友人とでは、友人の方が非友人よりも好意的に評価してくれていると認知していることに

表5 自己像と推測的自己像との「ずれ」得点についての分散分析表(絶対値の場合)

Factor	SS	df	MS	F	P
友人 / 非友人	0.011	1	0.001	0.000	ns
自己評価(高/低)	102.557	1	102.557	1.706	ns
交互作用	17.284	1	17.284	0.288	ns
誤差	5049.23	84	60.110		

表6 パーソナリティー特徴として「望ましい」形容詞の選択率

選 択 率	形 容 詞 対		選 択 率	
100%	明るい	暗い	0%
99	活発な	不活発な	1
98	のんびりした	こせこせした	2
99	感じのよい	感じの悪い	1
94	やわらかい	かたい	6
98	安定した	不安定な	2
63	地味な	派手な	37
86	やさしい	きびしい	14
75	理性的な	感性的な	25
98	意欲的な	無気力な	2
100	あたたかい	つめたい	0
94	たくましい	弱々しい	6
99	おもしろい	つまらない	1
99	しんちょうな	けいそつな	1
99	親しみやすい	親しみにくい	1
98	積極的な	消極的な	2
85	敏感な	鈍感な	15
92	強気な	弱気な	8
99	信頼できる	信頼できない	1
99	おちついた	おちつきのない	1

n=95

表7 自己像と推測的自己像の望ましき得点の平均と標準偏差

	自 己	友 人	非友人
高自己評価群	75.4 (8.02)	79.5 (8.43)	72.1 (7.61)
低自己評価群	71.2 (8.02)	75.7 (10.65)	70.0 (8.47)

上段：平均 下段：標準偏差

なる。低自己評価群では、「推測的自己像(友人)」の得点は「推測的自己像(非友人)」の得点より有意に高かったが($t=4.051, P<.01$), 「自己像」と「推測的自己像(友人)」, 及び「自己像」と「推測的自己像(非友人)」とは差がみられなかった。つまり, 友人並びに非友人からは, 自分からみたのと同じように見られていると認知しているが, 友人と非友人とを比較した場合, 友人の方が非友人よりも好意的な見方をしてくれていると認知していることになる。なお, 自己評価の主効果がみられたが, ここでの検討に関係する高自己評価群と低自己評価群の「自己像」間

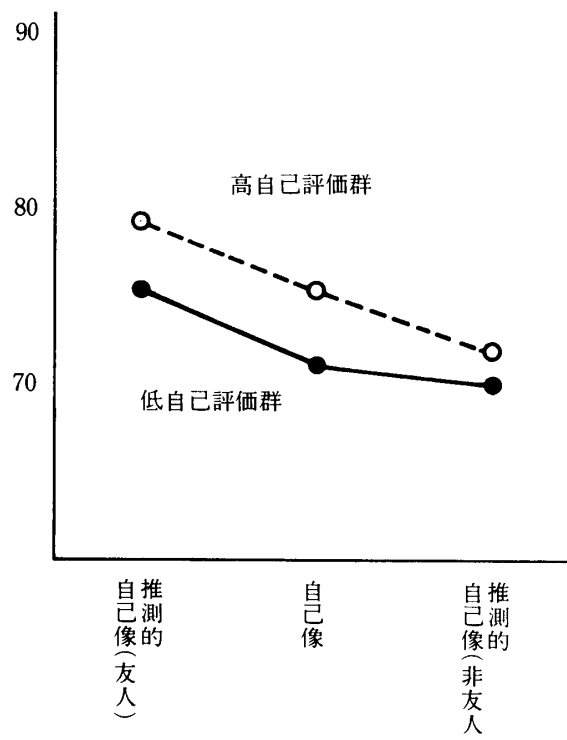


図2 自己像と推測的自己像の望ましき得点の平均

表 8 自己像と推測的自己像の望ましき得点についての分散分析表

Factor	SS	df	MS	F	P
自己/友人/非友人	961.561	2	480.78	6.516	P<.01
自己評価(高/低)	373.364	1	373.364	5.06	P<.05
交 互 作 用	25.773	2	12.886	0.175	ns
誤 差	9297.18	126	73.787		

表 9 態度に関する「自己像」と「推測的自己像」との「ずれ」得点の平均と標準偏差

	自己/友人	自己/非友人
高自己評価群	13.7 (4.74)	18.0 (7.46)
低自己評価群	14.5 (5.51)	17.3 (7.54)

上段：平均 下段：標準偏差

の差、「推測的自己像(友人)」間の差、並びに「推測的自己像(非友人)」間の差はともに有意でなかった。以上、自己評価の高低にかかわらず、非友人よりも友人の方からより好意的にみられていると認知しているという点では、Esteem 理論による仮説が支持されるが、「推測的自己像(友人)」と「自己像」とのずれが高自己評価群では有意であったのに対して、低自己評価群では差がなかったという点では Esteem 理論による仮説は支持されない。

次に、自分以外のことに対する態度のずれについて検討する。この場合も、15項目の各々について、「おおいに賛成」を7点、「かなり賛成」を6点、「やや賛成」を5点、「どちらとも言えない」を4点、「やや反対」を3点、「かなり反対」を2点、そして「おおいに反対」を1点と

点数化して集計した。各項目毎に、「自己」の態度についての評定値と「推測的自己像(友人)」ないし「推測的自己像(非友人)」についての評定値の差の絶対値を求め、15項目分合計したものを被験者個人の「ずれ」得点とした。表9には、「ずれ」得点の平均と標準偏差を示してある。分散分析の結果(表10)、推測的自己像(友人/非友人)の主効果が有意であったが($F=5.664$, $P<.05$), 自己評価(高/低)の主効果並びに交互作用は有意でなかった。高自己評価群、低自己評価群ともに「自己」と「推測的自己像(友人)」とのずれの方が「自己」と「推測的自己像(非友人)」とのずれよりも有意に小さい($t=2.976$, $P<0.1$; $t=2.259$, $P<.05$)。つまり、自分以外の事柄についての態度に関しては、自己評価の高低にかかわらず、親しくない人から思われているであろう自分よりも、親しい人から思われているであろう自分を、自分に類似していると認知しているのである。これは社会的比較過程の理論や認知的斉合性理論を支持する結果と考えることができる。

「自己像」と「推測的自己像」とのずれという観点から、他者への好意、自己像と他者からみられているであろう自分、及び自己評価の三者の関係を検討したが、社会的比較過程の理論・

表 10 態度に関する「自己像」と「推測的自己像」との「ずれ」得点についての分散分析表

Factor	SS	df	MS	F	P
友人 / 非友人	245.557	1	245.557	5.664	P<.05
自己評価(高/低)	1.375	1	1.375	0.032	ns
交 互 作 用	6.011	1	6.011	0.139	ns
誤 差	3641.95	84	43.357		

認知的斉合性理論に基づく仮説と Self-Esteem 理論による仮説のどちらか一方を一貫して支持するような結果は得られなかった。むしろ、他者からみた自分といっても、内容的には多岐にわたるものであり、そのどの様な側面を取り上げるかによって、斉合性理論によって説明できたり、Esteem 理論の方が妥当であったりすることが生じるのではないかということが示唆された。例えば、自分に関して「望ましき」が関係している側面については、余り親しくない人と較べて、親しい人からはより好意的にみられていると考える傾向があるし、親しい人からは、自分からみた自分以上に、良い評価や好意的な見方をされていると認知する傾向もみられる。一方、自分以外の一般的な事柄に関する態度については、親しくない人よりも、親しい人から見られているであろう自分を自分からみた自分と類似・一貫性があるように認知する傾向がある。

このように考えると、女子青年にとって友人は、非友人に較べて、望ましきのような評価的な側面が大きく関わるころでは、青年の自己評価を高めるように機能し、自分以外のことに対する意見・態度・信念といった側面に関わるころでは、青年自身の意見・態度等の妥当性の確信を強めるという機能を果たしていると考えることができる。

引用文献

- (1) Backman, C.W. & Secord, P.F. (1962) Liking, selective interaction, and misperception in congruent interpersonal relations. *Sociometry*, 25, 321-335.
- (2) Bailey, R.C., Finney, P. & Helm, B. (1975) Self-Concept Support and Friendship Duration. *The Journal of Social Psychology*, 96, 237-243
- (3) Byrne, D. (1961) Interpersonal Attraction and Attitude Similarity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 713-715.
- (4) Byrne, D. & Nelson, D., (1965) Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663
- (5) Festinger, L. (1954) A Theory of Social Comparison Processes. *Human Relations*, 7, 117-140
- (6) 浜名外喜男, (1974) パーソナリティ認知過程の研究 (1) —自己評価水準・受容水準と対人感情, 日本心理学会第 38 回総会発表論文集, 804-805
- (7) 深谷澄男・田宮葉子 (1971) 交友関係におけるパーソナリティの認知—認知の斉合性理論による検討, 実験社会心理学研究, 11, 1, 25-33
- (8) 井上正明・小林利宣 (1985) 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観, 教育心理学研究 33, 3, 253-260
- (9) Jones, S.C., (1973) Self- and interpersonal evaluation: Esteem theories versus consistency theories. *Psychological Bulletin*, 79, 185-199
- (10) 柏木恵子 (1982) 社会化と個性化 (講座・現代の心理学 2) 小学館, 321-322
- (11) 楠見幸子 (1989) 二者関係におけるパターンおよびその変化と心理特性の相互理解との関連 *心理学研究* 60, 1, 9-16
- (12) 久世敏雄・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・大野久・内山伊知郎, (1985) 青年期の社会的態度に関する縦断的研究—個人の変化過程の分析—, 教育心理学研究 33, 1, 11-21
- (13) 西平直喜, (1971) 青年分析, 大日本図書, 177-181
- (14) Rosenberg, M. (1965) *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton Univ Press, 17-18
- (15) 鈴木百合子 (1976) 自己評価維持の機制に関する社会心理学的研究, 日本心理学会第 40 回総会発表論文集, 1155-1156